

ラオスの伝統織物とその生産

－サムタイ村における垂直紋綜統の導入と布生産の産業化（手工業化）－

前 川 佐 知

ラオス人民民主共和国（以下ラオス）の首都ビエンチャンにある市場では、家庭で織られた手織りの伝統織物が並び、それらはラオス人や外国人観光客によって消費されている。これらの布は多くの場合、ラオスで一般的に使用されている垂直紋綜統を使って生産されており、現在でも首都近郊を含む全国の至るところで、家庭における布の生産を日常の風景として見ることができる。

今回の調査はラオスの伝統織物の生産の現状を把握することを目的とし、産地のひとつであるフアパン県サムタイ郡サムタイ村の織手への聞き取りを中心に調査を行った。現地調査の期間は2011年3月21日から4月5日である。

本稿ではその調査結果と、調査によって明らかとなったサムタイ村の布生産が垂直紋綜統の導入と共に産業化（手工業化）した経緯、伝統織物といわれる布の成り立ちを中心にまとめた。

1. ラオスにおける布の産地と調査地

1-1. ラオスにおける布の産地

手織りによる伝統織物の産地を把握するため、予備調査として、大型市場の多いビエンチャンの中でもラオス産の布を扱う店舗の最も多いサオ市場にて、扱われている布の産地と織手の出身地方に関して聞き取りを行った。

市場には布を扱う店が⁶⁷店舗あり、その店の主人を聞き取りの対象とした。ラオスの少数民族によって刺繍された布のみを扱う店の9店舗と、店の主人が不在であった12店舗を除いた46店舗において回答を得ることができた（表1・表2参照）。

聞き取りの結果、市場にて取り扱われている布の多くはビエンチャンとサムヌア地方で生産されており、またビエンチャンの織手にはサムヌア地方出身者が多

いことが分かった。加えて、ラオスにおいてサムヌア地方は、美しい布の産地であり織手の技術レベルが高い地域として有名であることから、サムヌア地方をラオスにおける伝統織物の生産の現状を調査するための調査候補地とした。

1-2. 調査地の選出

サムヌア地方とはラオス東北部に位置するフアパン県のことをさしている。ラオスでは国・県・郡・村の単位で女性同盟¹が組織されており、県の女性同盟が県全域にわたる女性のネットワークを有しているため、フアパン県女性同盟の代表者へ布の産地に関して聞き取りを行った。その結果、サムヌア郡とサムタイ郡で盛んに布が生産されているという情報を得ることができた。また、2つの郡を比べると、サムタイ郡の方が生産している量が多いという情報も得られた。よってサムタイ郡を調査候補地とした。

次にサムタイ郡における布生産の状況を把握するため、郡の女性同盟の代表者に聞き取りを行った。代表者によると、郡内のどの村でも布の生産が行われているが、とりわけ盛んな村はサムタイ村とパンサワン村、そしてベトナム国境への道沿いの村であるということであった。しかし、国境への道は非常に悪く、乗り物での移動が困難であること、また物取りが頻繁に出ると注意を受けたため、道沿いの村での調査は断念した。加えてパンサワン村は1992年から郡の役所や市場が集まる中心地となっており、現在では様々な地域から人が集まっているとの情報も得られたため、ひとつの村として把握するには困難が生じると判断し、1992年まで郡の中心地であったサムタイ村を調査地とした。

1-3. サムタイ村について

サムタイ村については、筆者が滞在中に調査した内容や村人より得た情報をまとめたものである。また村の人口や公務員の数も村長によるものである。

(1) 環境と人々の暮らし

サムタイ村は郡の中心地であるパンサワン村から1kmも離れていない。村に沿ってサム川が流れており、川の対岸に広い農地を有している。村人は生活用水としてこの川の水や離れた小川から水を引いて使用しているが、調査時はパンサワン

村に郡の水道施設ができ、配水管を各家庭に敷く作業の最中であった。電気は郡内の水力発電所から引かれているが、発電力が弱く常に電力不足である。そのため村には3・4日に1日（3～12時間程）送電される程度である。ガスはなく、主に山で集めた薪を用いて火を熾している。

近年、建築に適した木材の不足によって価格が上昇していることから、ブロックを用いて建てた平屋も数軒あるが、村人は基本的に木や竹を用いて建てた高床式住居に住む。バイクと耕運機は普及しているが、車を所有する家庭はない。

基本的には農業を生業としているが、後に述べる女性による布生産も家計を支えている。また公務員として働くものが55名（内女性17名）、村で雑貨屋を営む家が3軒ある。他に、ピエンチャンなどの都市部で働く家族を持つ家庭が多く、その家族からの送金が生活を支えている場合もある。

(2)人口と民族構成、及び信仰

村の人口は705人（内女性237人）である。多民族で構成されており、その比率はラオプット（仏教ラオ）族：約87%、タイデン（赤タイ）族：約11%、タイカオ（白タイ）族：約2%である（表3参照）。村では民族に関わらず婚姻関係が結ばれており、婚姻により信仰や民族名を変える（女性が男性のものへと変える）ことが通常となっている。

サムタイ村におけるラオプット族（仏教信仰）とタイデン族（精霊信仰）との文化の違いは、信仰による年中行事と葬儀、タイデン族の女性にしきたりが多いという点であり、その生活文化は酷似している。タイカオ族は近年ベトナムから移住してきており、タイデン族と年中行事を行う時期は異なるものの、同じ精霊信仰である。サムタイ郡はベトナムと隣接しているため、タイカオ族以外の民族でもベトナムに親族・親類を持つ村人がいる。

聞き取りを行う中で、仏教信仰であるがタイカオ族と自らを称する者が2名（村の統計上はラオプット族に含まれている）いた。そして2名とも、この民族名は祖先から伝えられたものだと説明した。そのことにより同じ村の中に精霊信仰のタイカオ族と仏教信仰のタイカオ族がいることが明らかとなった。

村の年配の知識人によると、ラオプット族とは固有の民族名ではなく、この地

域一帯で使われているタイ系民族の仏教信仰者の総称であり、サムタイ村に住む仏教信仰者の民族名はタイカオ族であるという。

サムタイ村では歴史が古文書によって伝え残っており、そこには、1425年に精霊信仰であったサムタイの地にルアンパンの王族によって仏教が伝えられ、以降、仏教信仰者は仏教を、精霊信仰者はその信仰を別々に守り続けたということが記されている。約600年経った現在、サムタイ村では民族の違いを言い表す時に、民族名ではなく信仰の違い（仏教信仰・精霊信仰）で表すことや、仏教信仰者が自らを仏教信仰のラオ族という意味であるラオプット族と表現する習慣にその歴史が残っていると考えられるが、確認することはできず、不明である。また、信仰の異なる2種のタイカオ族が、仏教が伝播する以前に同じ民族であったかも不明である。

しかしサムタイ村の仏教信仰者は、死者の弔いは僧に頼むが、病気や怪我、不妊といった体の不調に対しては呪術師に頼み、彼（彼女）を通じて精霊や祖先の霊から解決を得るなど、精霊信仰が土着信仰として残っている²。この仏教信仰者が精霊信仰の思想を持つことは、他地域の仏教信仰者においても見られることである³が、ラオスで一般的にパーシーと呼ばれる儀式⁴において、サムタイ村の仏教信仰者は他地域と異なる。

通常、タイ系民族がパーシーの儀式を行う時、仏教信仰であれば白色の糸を用いる。それに対し、精霊信仰であれば黒（藍）色の糸を用いることが多い。それはタイ系民族の精霊信仰者にとって、白色の糸を手首に巻くという行為は葬儀の際にしか行われぬものであり、日常で白色の糸を使用することは不吉で忌み嫌われるからである。それに対し仏教信仰者は葬儀の際にも白色の糸を巻く。

しかし、サムタイ郡では仏教信仰者であってもパーシーの儀式は黒（藍）色の糸で行われている。また、精霊信仰者と同様に葬儀の時にのみ白色の糸を使用する。仏教信仰者による黒（藍）色の糸の使用は、同じフアパン県内でもサムタイ郡以外では見られず⁵、この地域だけに見られる特別なことであり、他地域に比べ精霊信仰の思想が色濃く残っていると考えられる。

サムタイ村では民族名や信仰、その文化において以上のような特徴や差異が見られるが、それらを明確に扱うことは困難である。そのため今回の調査では民族

や信仰に重点は置かず、サムタイ村という地域を調査対象とした。

1-4. 調査内容とその対象

織手への聞き取り調査は、布や布に関する文化、布生産の工程や染織技術などについて行った。本稿で扱った調査項目は、名前、年齢、出身地、民族名、織技術を学び始めた年齢、可能な織技法、綿花の栽培・紡績の経験、養蚕・製糸の経験、天然染色と化学染色の経験、家族内の織手の人数、家にある織機の数、織機に掛かっている布の種類と素材、使用している箆の産地、緯浮織（縫い取り織）に使用されている開口具、垂直紋綜紬の使用開始時期とその素材、布の売り先、布を売り始めた時期と契機、白綿布を織るか、シンを織るか、ピエンチャンに住む親戚の有無、である。

村は北地区と南地区に分かれており、今回は北地区の56戸を調査の対象とした。その内、不在であった7戸（元締め2名を含む）、男性のみで布生産を行っていない3戸、年配の女性のみで織りを行っていない1戸を除いた、45戸織手44名（織機92台）・元締め2名に聞き取りを行うことができた。

2. サムタイ村における布生産について

聞き取りを行った全戸で織機を有し、布生産を行っていた。織手が織技術を母親や姉、親戚から学び始めた年齢の平均は約10歳である。各家には、その家に住む織技術を得た女性の人数分、もしくはそれ以上の織機を有しており（村内のほかの家に置いている織機も含む）、聞き取りを行った織手とその家族の中で、全く布を織らない女性は1名だけであった。

聞き取りを行う中で織手より、公務員として働いたり雑貨屋を営んでいる女性であっても、その合間（休憩時間や帰宅後、休日）に布生産を行うこと、学校に通うために他県や他郡へ行った女性も、長期休暇には実家に戻って布生産を行うといった話を聞くことができた。

2-1. 生産されている布の生産目的と用途

聞き取り時に、織手とその家族が有する織機で織られていた布の名称には、用途による固有名称のない布、パーピアン、シン、ティンシン、白綿布の5種類が

みられた (表4参照 92台の内、1台には経糸がかかっていなかった)。そして織手への聞き取りによってこの5種類の布のうち2種類が売ることを目的として織られ、3種類は生活の中で使うことを目的として織られていることが分かった。

それぞれの布の用途や意味、生産に関する現状は次の通りである。

(1) 売ることを目的として織られる布

売ることを目的として織られている布は、用途による固有名称のない布とパーピアンである。聞き取り時には織機91台中78台(約86%)で織られており、村で生産される布の大半を占めている(表4参照)。

パーピアンはラオスの仏教信仰者が仏教儀式や寺へ参る際に使用する肩掛け布であるが、固有名称のない布は使用方法が明確ではない。固有名称のない布の呼ばれ方の例としては、「模様が全面に入っている布」、「大きな模様が布の両脇に入っている布」、「菱形の模様を7回繰り返す布」、「動物模様の布」などがあり、これらは売り先との間で使用されている表現である。

布の売り先に関して聞き取りを行ったところ、生産された布は布の元締め、又は親戚を通じて売られていることが分かった(表5参照)。

布の元締めとは、織手が織った布を集めて売る人のことである。デザインや枚数を決めて織らせ、織手に報酬を支払う場合と、織手の意思で織った布を買い取ったり、売れ次第で報酬を支払う場合がある。織元の性質も問屋の性質も持っているが、どちらも織った布の価格を決める立場であることから、ここでは元締めと表現することにした。元締めは集めた布をピエンチャンなどの大きな都市の市場に卸したり、店舗で販売したりし、その差額を利益としている。

元締めに売らず、親戚を通じてしか売らない人は44名中5名のみであったが、この親戚も自ら市場の店舗に売り歩くため、元締めと同じ性質を持つと言える。

織手からは、現在織られている固有名称のない布とパーピアンは、以前は村で織られることも使用されることもなかった布であるという話を聞くことができた。また、女性達が先祖より受け継いできた布の模様⁶がデザインとして利用され、パーピアンやショール、デーブルセンター、壁掛けとして織られるようになった

ことや、日常的に使う布はもちろん女性が婚姻や出産・子育ての準備として織り貯めていた布⁷が、近年になり売りものとなったという話も聞くことができた。

村の元締め2名からは、布の模様やデザインは村で受け継がれてきたものだけではなく、店や市場のニーズに合わせて流行のものを取り入れ生産しており、美しく興味を惹かれるものであれば、写真に写っている模様からも取り入れているという話を聞くことができた⁸。

(2)生活の中で使うことを目的として織られる布

シン⁹とティンシン¹⁰、白綿布の3種類が生活の中で使うことを目的として織られている布であり、聞き取り時には91台中13台(約14%)で織られていた(表4参照)。

聞き取り時に機にはかかっていないが、日常的にシン¹¹と白綿布を織るか、という聞き取りを行ったところ、シンは約95%の家庭で、白綿布においては100%の家庭で織られていることが分かった(表6参照)。この数字からも分かるように、サムタイ村では世代に関わらずシンが日常的に着用されていた¹²。

織手からは、シンを市場で買うことは織技術を持たない女性がする恥じるべき行為であること、また織手は自分や家族が着るためのシンだけでなく、親戚や友人への贈答用としてもシンを織るという話が聞かれた。サムタイ村において、この自分で織ったシンを贈ることは、相手への信頼や尊敬を表す方法のひとつであり、贈るという行為や贈られた側がそのシンを着ることによって互いの信頼関係や、助け合って生きているということを確認合うことになるという。またシンは嫁入り道具のひとつであり、婚姻の際には花嫁と花婿側の女性との間で同じ意味を持って、シンの贈り合いが行われる¹³。

白綿布は家族の婚姻や、とりわけ葬儀¹⁴に必要不可欠なもので、各家庭で絶やしてはならない布であること、また、座布団や布団、枕、蚊帳といった日用品を作る布地としても用いられることなどが聞かれた¹⁵。

2-2. 布の生産工程

布の生産には大きく分けて、製糸・紡績(又は購入)、染色、織り、の3つの

工程がある。各工程は一人の織手、もしくは家族や友人との共同作業で行われるが、それらは全て女性のみで行われる。サムタイ村の各工程における現在の状況は次の通りである。

(1) 製糸と紡績、糸の購入

91台の織機で織られていた布の地糸に使用されている糸は、65台（約71%）が絹糸、26台（約29%）が綿糸であり¹⁶、絹糸が多く使用されている。

村で養蚕から製糸まで行っているのは44名中6名（約14%）、綿花の栽培から紡績まで行っているのは1名（約2%）のみであった。これら以外の糸は、郡の中心地にあるパンサワン市場、もしくはビエンチャンに住む親戚などを通じて、都市部の市場で購入している。

パンサワン市場の糸屋では、生糸の状態のものと化学染色された絹糸、未染色のものと化学染色された綿糸、また化学染色された化繊糸も売られていた。4軒の糸屋で聞き取りを行ったところ、以前は絹糸の流通量は少なく、郡内の村から時折持ち込まれる程度であったが、2005年に首都へと続く主要道路が整備されて以降、ビエンチャンから絹糸が沢山入ってくるようになったこと、また、道路が整備されると同時に、それまで市場の組合で取り決められていた品物の専売制が廃止され、絹糸を扱う店舗が増えているといった話が聞かれた。

現在、養蚕を行っていない織手は38名おり、そのうち一度も養蚕を行ったことのない6名を除いた32名に聞き取りを行ったところ、2005年以降に養蚕を辞めた人は26名（約81%）であることが分かった。その理由として、絹糸が市場で容易に買えるようになったこと、桑の木に登る体力を失ったことがあげられた。

綿糸に関しては、現在、綿花栽培を行っていない織手は43名おり、そのうち一度も綿花栽培を行ったことのない13名を除いた30名に聞き取りを行ったところ、2005年以降に綿花栽培を辞めた人は2名（約7%）のみであり、残り28名の多くは80年代と90年代にすでに辞めていることが分かった。織手からは辞めた理由として、当時すでにサムタイ郡と隣接するベトナムから綿糸が入ってきており、市

場で常に売られていたことがあげられた。

(2)染色

現在、織り手44名のうち天然染色のみを行う人が5名(約11%)、化学染色のみ行う人が9名(約20%)、どちらも行う人が29名(約66%)、全く染めない人は1名(約2%)であった。

天然染色のみ行っている5名のうち、化学染色の知識が全く無く、以前からずっと天然染色のみ行っているという人は1名だけであった。他4名は、以前は天然染色とともに化学染色も行っていたという。しかし近年、国内外において天然染色された布が伝統織物として認識されるようになり、その価格が上がったことを受け、化学染色を辞めたということであった。

また、村では2006年と2010年に、県の女性同盟によって天然染色セミナーが織手に対して行われており、新たな染材や染色方法が指導されている。

(3)織り

経糸や緯糸の下準備は一人の織手、場合によっては数名の織手が共同して行い(元締め委託されて織る場合、経糸の下準備は予め元締めによって行われることが多い)、機掛け・織り作業は、基本的には最後まで一人の女性によって行われる。

織りの技法としては平織、緯浮織(縫い取り織)、経浮織の3種類が見られ、平織と緯浮織は44名すべての織手が可能な技法であるが、経浮織は32名(約73%)が可能な技法であった。

2-3. 緯浮織に使用されている開口具

織機91台のうち83台(約91%)で緯浮織が行われており、その開口具として垂直紋綜統、紋棒、輪状綜統の3種類の使用が見られた。またそれらは併用されていた(表7参照)。

緯浮織に用いられる各開口具の経糸開口方法は次の通りである。

(1)垂直紋綜統

下準備として、まず垂直紋綜統1本に対し経糸が2本ずつ通っている状態にする。織る予定の模様に従ってどの紋綜統を使って経糸を開口させるのか予め選び出す。選び出した紋綜統とその他の紋綜統の間に紋糸（又は紋棒）を挿入することによって、紋綜統に経糸の開口を記憶させる。模様一段に対し1本の紋糸（又は紋棒）が経糸の開口を記憶することになり、垂直紋綜統には模様の段数分の紋糸（又は紋棒）が挿入された状態になる。



写真1 写真中央、経糸に対して垂直に交わっている糸の束が垂直紋綜統

模様を織る際は、垂直紋綜統に挿入されている紋糸（又は紋棒）を順に選び、それを経糸に沿わせて滑らすことによって紋綜統を分け、手前に選び出された紋綜統を持ち上げることで経糸の開口を決定する。紋綜統によってできた経糸の開口に、開口保持具を挿入し開口を保持した後、緯糸を挿入することで模様を織り出す。

挿入できる紋糸（又は紋棒）の数は垂直紋綜統の長さにもよるが、多くて200～250本程であり、上下反転した模様を繰り返し何度も織ることが出来る。(写真1)

(2)紋棒

下準備として予め、織る予定の模様に従って選び出した経糸の間に紋棒を挿入し、経糸に常に紋棒が挿し込まれ、開口を維持した状態にしておく。

経糸に挿入されている紋棒を選び、紋棒が維持している開口によって経糸の開口を決定する。維持されている経糸の開口部に開口保持具を挿入し、垂直に立てて開口を大きく保持した後、緯糸を挿入することで模様を織り出す。

使用する紋棒の数は、織る模様によって異なるが大体1～3本程度であり、繰り返し何度も同じ模様を織ることが出来る。(写真2)

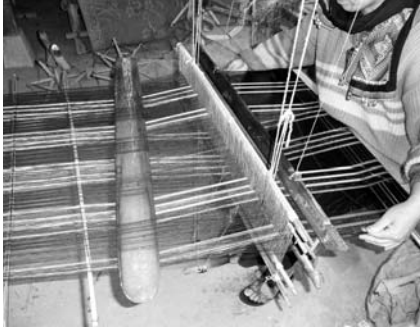


写真2 写真左手、経糸に挿入されて 写真3
いる2本の細い棒が紋棒

(3)輪状綜統

下準備として、織る予定の模様に従って予め経糸を選び出し、その経糸に輪状綜統を作る。模様の段数分の輪状綜統が、経糸に設置された状態になる。輪状綜統を選び、持ち上げることによって経糸の開口を決定する。輪状綜統によってできた経糸の開口に開口保持具を挿入し、開口を保持した後、緯糸を挿入することで模様を織り出す。

綜統から間丁まで輪状綜統を作ることは可能だが、開口に困難が生じるため、使用できる輪状綜統の数は多くて20～25本程度である。また、繰り返し何度でも同じ模様を織ることが出来る。(写真3)

2-4. 緯浮織に使用されなくなった開口具

現在、緯浮織に使用されている開口具は前述の3種類であるが、以前は他にもう1種類の開口具が存在していた。また、同じような模様を布に施す技法として刺繍が行われていた。

使用されなくなった棒綜統による経糸開口方法と、刺繍の説明は次の通りである。棒綜統は、前述の紋棒と形状・機能は同じであるがその使用方法が異なるため、ここでは棒綜統とした。

(1)棒綜統

下準備として、経糸を織る予定の模様に従って選び、その開口に開口保持具を



写真4

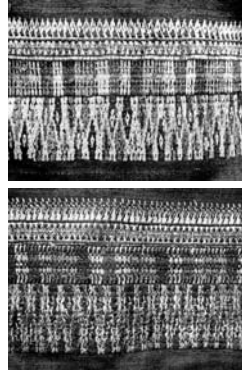


写真5 表面

写真6 裏面

挿入し、開口を保持した後、緯糸を挿入し、模様を織り出す。その経糸の開口部に、箴と地綜統の奥側（間丁側）で紋棒を挿入し、開口を維持しておく。この作業を、織る予定の模様の段数に合わせて繰り返す。下準備を終える時には模様を一度織った状態となり、経糸には模様の段数分の紋棒が挿入された状態となる。

模様を織る際は、経糸に挿入されている紋棒を順に選び、その紋棒が維持している経糸の開口に沿って開口保持具を挿入した後、垂直に立てて開口を大きく保持し、緯糸を挿入することで模様を織り出す。その後、選んだ紋棒は抜き取り、次の紋棒を選び、上記と同じ作業を繰り返して織り進めて行く。

経糸の全体に紋棒を挿入することができるため、使用できる紋棒の数は大体300～400本程、多くて700～800本程であるが、上下反転した模様を繰り返して織ることは一度しかできない。（写真4：ラオス北部で撮影したもの。織機の形状は異なるが、棒綜統の使用法は以前にサムタイ村で行われていたものと同じである。）

(2)刺繍

裏面を見ながら刺繍する。（写真5・6：刺繍による模様）

2-5. 導入された開口具と使用されなくなった開口具の比較と現在の使用状況
棒綜統は一度の下準備で、上下反転した模様を一度しか織ることができない。

それに対し垂直紋綜統では、紋糸（もしくは紋棒）による一度の下準備で、上下反転した模様を半永久的に織ることが可能である。よって垂直紋綜統は棒綜統に比べ、生産効率の良い開口具であると言えるだろう。

また、以前に刺繍をしていた織手の話によると、刺繍では2ヶ月ほど掛かる模様を、垂直紋綜統では1週間ほどで織り上げることができるということであった。刺繍は垂直紋綜統と比較できないほどに手間隙掛かるものであると言えるだろう。

サムタイ村では現在、棒綜統は全く使用されておらず、刺繍も行われていない。それに対して垂直紋綜統は、83台中75台（約90%）で使用されている。また一軒単位で見ると、43戸中41戸（約95%）では、数台ある織機のうち最低でも1台には垂直紋綜統が備わっており、残り2戸では紋棒のみの使用であるが、家には垂直紋綜統を有しており、全戸に垂直紋綜統が存在する。

2-6. 現在のサムタイ村の布生産

現在のサムタイ村の布生産は、生活の中で重要で必要不可欠な布の生産を行いながらも、売ることを目的とした布の生産が中心となっている。そしてその布は市場のニーズに合わせ、生活の中で使用されてきた布を変容させた布であり、その生産には、以前使用されていた非効率的な棒綜統と刺繍は姿を消し、生産効率の良い垂直紋綜統の使用が通常となっている。このことは本来、家族のために行われてきた布を織るという手仕事で、現在では金銭を得る手段となっていると言えるであろう。

また、ラオスにはワンシンとよばれる仏教行事が月に数日あり、その日は寺へ参る日であるとともに機織りをしてはいけない日となっている。サムタイ村の仏教信仰者も同様であるが、近年、布を売るようになって以降は、ワンシンでも機織りが行われている。これは信仰による決まりを守るよりも、合理的に布生産を優先していると言えるだろう。また、布を売るようになるまでは農閑期に行われていた布の生産が、現在では農閑期・農繁期に関わらず、どの家でも1年を通して行われ、織手はほとんど1日も休まず布を生産し続けている。

以上のことより、サムタイ村では現在、布生産の産業化（手工業化）が起きていると考えられる。

3. 布生産が産業化（手工業化）した経緯について

3-1. 産業化（手工業化）の契機と要因

村での聞き取り調査より、布生産の産業化（手工業化）が起きた契機と要因として、村の出来事、元締めの出現、新しい開口具である垂直紋綜統の使用が考えられる。それぞれに関する聞き取り結果は次の通りである。

(1)村の出来事

サムタイ村の現代の歴史を記した文書の存在を確認できなかったため、ここで扱う村の出来事は全て、織手と年配の知識人や元郡長の記憶をまとめたものである。

i) 1975年前後...戦争と革命による村人の移動

戦争が激化したことにより、1964年から73年まで村人達は山の中に住み、戦火を逃れていた。またピエンチャンまで逃げる村人もいた。1974年には戦争がおさまり、1975年の革命後、戦争の終結により他県やピエンチャンへの移動が安全に行えるようになった。またサムタイ郡から200～300名ほどが軍人として、優れた人材は公務員や教員として教育を受けるためにピエンチャンに召集され移住した。当時、村人は常に自給自足の厳しい生活を送っていたため、その移住した親戚を頼るなどして、ピエンチャンに移住したり一時滞在する者がいた。

ii) 1987年...市場の民営化

サムタイ村にあった郡の市場の店舗が1987年に国営から民営となり、一般の村人も商いができるようになり、また様々なものが売られるようになった。

iii) 1992年頃...村人のピエンチャンへの移住

当時、村から郡の主要道路に行く際にサム川を渡る必要があり不便であったこと、人口増加によって土地が不足していたことから、1992年に一部の村人が現在の郡の中心地であるパンサワン村を作り移住した。しかしそれと同時に村に分裂が起り、ピエンチャンへ移住する人が多く出た。その後、残った村人も1995年に現在のサムタイ村とサムトン村へ移住した。

iv) 2005年以降...道路整備による流通の増加

2 - 2 - (1)で先に述べた通り、2005年に首都へと続く主要道路が整備されると同時に、市場の専売制が廃止されたことにより物流量や人の往来が増加した。また、道路整備が行われたことにより、村を訪れる外国人観光客が増加した。

(2)元締め

布を元締めに布を売り始めた時期について聞き取りを行ったところ、元締めの出現以降、織技術習得以降、婚姻による移動以降の3つの契機が確認できた。また、元締めの存在が初めて確認されたのは1972年（1名）であった（表8参照）。しかし1972年という時期は、他の織手の証言より早いため、時期を明確に記憶している人数の多い1975年が、元締めが確認された正確な時期であると言えるだろう。

織手によると元締めはサムヌア郡から来ており、それまで生活の中で使うか、もしくは物々交換するものであった布を買い集めたということであった。また新しい布だけでなく、古い布も買い集めたという。

この元締めの出現によって、布を売って金銭を得るということを経験し、布を売ることが自給自足の生活を楽にする術のひとつであるという認識を織手に与えたと考えられる。

1975年当初、布を売る人は少数であるが、徐々に増加し、2001年（以降は、婚姻による移動以降の2名しか見られないため）にはほぼ全戸の織手が布を売るようになっている（表8参照）。

聞き取りを行った際、初めて布を売った元締めとして10名の織手が同じ名前をあげた。そのため、現在も布屋を営んでいるその元締めに聞き取りを行った。

この元締めはサムタイ郡出身者であり、1976年から教員としてピエンチャン（85年にルアンパバン¹⁷へ転勤）に移住した。その後、1987年に教員を辞め、サムヌア地域での布の収集や注文を始めており、自分が同地域で元締めを始めた一人目という認識を持っている。当時その元締めは、1986年に国が市場経済を導入したことにより将来的にたくさんの人がラオスを訪れることを見越し、工芸品を収集することが今後大きなビジネスチャンスになると考えたため始めている。ま

た新しく織られた布だけではなく、各家庭に残され、継承されていた古い布も集めてルアンパバンで売った。当時は月に2～4回程サムタイ村まで収集に通っており、元締めが来たことを知った織手は、それが深夜であってもすぐに会いに行き、争って布を売り込んだという。後に同業者が増え利益が減ったことにより、98年から収集地域やその方法を変えている。

この都市を拠点とする元締めが村に訪れるようになったことは、織手に売ることを目的とした布の生産を行う機会を頻繁に与えたと考えられる。

次に、村の元締め4名のうち不在の2名を除いた2名から聞き取りを行った。

1名(元締め)は1994年に元締めを始めている。村で集めた布を、ピエンチャンに住む自分の娘に送り、その娘が市場で売り歩いている。また現在はサムタイ村だけでなく、郡内の多くの村でも布を集めて売っている。

もう1名(元締め)は1992年に村で一番初めに元締めを始めている。当初は村で布を集め、都市部の布屋に売り歩いた。2003年、ルアンパバンに自分の店を開いて以降は、その店で売っているということであった。また2004年には観光地であるバンビエンにも開店している。

村で元締めを始める人が現れて以降、売ることを目的とした布の生産がより一層、身近なことになったと考えられる。

また、元締めは2006年頃からは布を集めるだけでなく、デザインとそれに合った箒や天然染色した糸を織手に渡して織らせ、織り賃のみを支払う方法をとっている。織手が織り間違えるなど失敗した場合は織り賃がカットされる。他に、織手に対して天然染色した糸の販売も行っている。元締めは月に何度も都市と村とをバスで往復しており、必要となる糸や箒を都市から、村からは布を運んでいる。2005年に道が整備されたことによって、この往復が以前よりも楽に行えるようになったということであった。

不在のため聞き取りを行えなかった2名の元締めの内1名もこの方法を取り、ピエンチャンの市場で売っているということであった。

元締めがデザインや糸を指定し、賃金カットによって織り間違いを抑止していることによって、デザインの統一、品質の統一が可能になったと考えられる。そ

れによって受注、材料の準備、製造・品質管理、納品の生産工程が元締めによって管理され、その中で織手は布を織る職工という立場に置かれ、織るという労働によって素早く現金を得ることができるようになっている。

聞き取りによって明らかとなった、元締めの出現時期や布生産に関する変化の過程は次の通りである。

- ・1975年頃...元締めの出現
- ・1987年...都市を拠点とする元締めの出現
- ・1992年...村の元締めの出現
- ・2001年頃...元締めに布を売ることが通常となる
- ・2006年頃...元締めによる生産工程の管理と織手の職工化

(3)垂直紋綜統

織手に垂直紋綜統を使い始めた時期について聞き取りを行ったところ、綿糸で作ったもの（村箒¹⁸・綿糸）、ナイロン糸で作ったもの（村箒・ナイロン糸）、ピエンチャンで作られた箒にすでに備わっているナイロン糸で作られたもの（ピエンチャン箒・ナイロン糸）の3種類の垂直紋綜統がみられた。また、その使用開始は、村箒・綿糸、村箒・ナイロン糸、ピエンチャン箒・ナイロン糸、の順で起きている（表9参照）。

聞き取りによると一番早い人で1973年（2名）に使用している。この73年と答えた2名はどちらもその年に結婚しており、結婚によるサムタイ村への移動後から垂直紋綜統を使い始めたと記憶している。よって、1973年頃にはすでに使用されていたと言えるだろう。

垂直紋綜統は首都ピエンチャンで使用されていたものであり、その伝播は1975年前後にピエンチャンと村とを往復した人によって行われている。実際に、移り住んだ妹に会うため1975年にピエンチャンに行ったという織手から話を聞くことができた。彼女によると、垂直紋綜統をそのまま持ち帰ったのではなく、形状を覚え、それを村で再現して使い始めたということである。当初は、村で作られた

箆に、村で作った綿糸を撚って作った糸を綜統糸として使用していた。しかし綜統糸が綿糸であるために、綜統糸と経糸との間で摩擦が生じて扱い難いため、狭い幅の布（主にティンシン）を織る時に使用していたという。また、村の誰もが使用していたのではなく、ピエンチャンに行った村人と関わりを持つ一部の人が使用していたということであった。

1988年以降には、ナイロン糸で作られた垂直紋綜統の使用が増えている（表9参照）。織手によると、市場に外国製のナイロン糸が売られるようになって以降、それを綜統糸として使用するようになり、また、その綜統糸は経糸との摩擦が少ないため扱い易く、広幅の布を織ることを可能にしたということであった。

そして1990年頃からナイロン糸で作られた垂直紋綜統を備えたピエンチャン製の箆の使用が始まっている（表9参照）。織手によると、ピエンチャン製の箆は村で作られた箆よりも箆密度が高く、より美しく丈夫な布を織ることが可能になったということであった。また、その箆はピエンチャンと村とを往復した村人や元締めによって運ばれたということであった。

村の元締めによると、元締めを始めた1994年に初めてピエンチャンに行った際、垂直紋綜統を備えた箆を100個ほど買って帰り、村で売ったということであった。

1973年頃に伝播した垂直紋綜統は、ナイロン糸の使用によって、より効率の良い開口具へと変化し、そのことが垂直紋綜統の使用を徐々に広めたと考えられる。そして、1990年頃に始まった垂直紋綜統を備えたピエンチャン製の箆の使用が、普及をより一層促したと考えられる。

現在、村人はピエンチャンに住む親戚を頼って村とを頻繁に往復している¹⁹。この移動する村人によって、村からは布がピエンチャンの元締めや親戚に届けられ、ピエンチャンからは糸や箆が運ばれていること²⁰、また、2005年の道路整備・専売制の廃止以降、2 - 2 - (1)の絹糸と同様に、パンサワン市場ではこの垂直紋綜統を備えたピエンチャン製の箆の取り扱いが増えていることから、現在では容易に入手できるようになっている。調査時、44名中43名（約98%）がピエンチャ

ン製の箆を使用していることから、その普及が伺える。残り1名は白綿布を織るために村製の箆を使用していた²¹。

1973年頃に村人の移動によって伝播された垂直紋綜統は、2003年には全戸で使用されるようになり（表9参照）、また2 - 5で先に述べた通り、現在でも全戸に存在していることから、完全に定着していると言えるだろう。

聞き取りによって明らかとなった、垂直紋綜統の伝播から定着までの時期は次の通りである。

- ・1973年頃...垂直紋綜統の伝播
- ・1988年頃...垂直紋綜統の普及
- ・2003年頃...垂直紋綜統の定着

3 - 2. 産業化（手工業化）の経緯

次の表は、村の出来事、元締めの出現時期、垂直紋綜統の定着過程を時系列に沿って並べたものである。

年	村の出来事	元締め	垂直紋綜統
1973	戦争と革命による村人の移動	元締めの出現	垂直紋綜統の伝播
1975			
1987	市場の民営化	都市を拠点とする元締めの出現	垂直紋綜統の普及
1988			
1992	村人のピエンチャンへの移住	村の元締めの出現 元締めに布を売ることが通常となる	垂直紋綜統の定着
2001			
2003			
2005	道路整備による流通の増加	元締めによる生産工程の管理	
2006			

布を売り始めるまでは生活の中で使う布だけが生産されており、それらは全てひとつひとつ時間を掛けて作られる一品ものであった。垂直紋綜統が伝播した1973年頃はまだ布を売るという行為が広まっておらず、大量生産の必要も生産効

率を上げる必要もなかったため、垂直紋綜統は普及しなかったと考えられる。

しかし1975年頃、戦争の終結と共に元締めが現れ、さらに1987年には、国が市場経済を導入したことに合わせて都市を拠点とする元締めが現れたことにより、織手は徐々に布を売りはじめ、布の生産効率の向上を意識するようになったと考えられる。そして生産効率の良い開口具である垂直紋綜統を使用するようになり、その使用がナイロン糸やビエンチャン製の箆の導入によって普及すると共に、布生産の産業化（手工業化）が進んでいったと言えるだろう。

そして現在、サムタイ村の布生産は村の元締めを中心に産業化（手工業化）し、垂直紋綜統は不可欠なものとして定着している。

また、この産業化（手工業化）の経緯の中で、垂直紋綜統の伝播を引き起こし、販路や流通の拠点として作用したのが1975年前後と1992年頃にピエンチャンに移住した村人の存在であろう。

以上、サムタイ村の布生産の産業化（手工業化）は、村人の移動や物流の増加といった村の出来事と元締めの出現、垂直紋綜統の使用によって起きたと言えるであろう。

まとめ

今回の調査によってサムタイ村では、布生産の産業化（手工業化）が起きていること、そして生産されている布は、生活の中で使われてきた布の模様や用途を変容させたものであることが明らかとなった。

結果、現在ピエンチャンの市場で伝統織物として売られている布の多くが、本来の模様や用途が変容しただけでなく、新しく導入された開口具によって生産されたものであることが分かった。

売るという目的を持った布が、市場のニーズに合わせて変容し、染織技法は生産効率の向上を目指すのは当然のことであり、本来の意味も染織技法も変化した布が伝統織物という地位を維持し続けることも当然の流れであろう。しかし、その変化がどの程度までのものを伝統織物と呼ぶことができるのだろうか。形骸化された伝統織物は、果たして伝統織物なのであろうか。

そしてこの伝統織物の形骸化を引き起こしている産業化（手工業化）の背景に

は、市場経済の導入と共に進む近代化が大きな流れとして存在し、日本を含む各地域の伝統文化においても同様の变化を経験していることは容易に想像できる。伝統織物は、売るという目的を持った時点で、生活や文化から切り離され、伝統産業によって生産される製品となり、伝統織物ではなくなるのではないだろうか。筆者にとって今回の調査は、伝統の定義についても考える機会となった。

また、サムタイ村では布生産が産業化(手工業化)した現在でも、生活の中で使われる重要な布は、売るという目的を持たずに少量ながらも生産され続けていることも明らかとなった。基本的に農業を生業とする農民である彼女達にとって、助け合う仲間はとても大切な存在であり、この布がそういった人と人との関係の構築と維持という重要な役割を担う必要不可欠なものであるため、生産され続けているのであろう。この布本来の意味を持つ布の生産は、村の生活環境や文化によってかろうじて維持されている状況であり、近代化の進むラオスにおいて、生活に根付いた伝統織物をみることのできる最後の貴重な時代なのかもしれない。

加えて、今回の調査で明らかとなった、ラオスで一般的に使用されている垂直紋綜絢が、布の産地であるサムタイ村には比較的最近である1973年頃に伝播したという事実は大変に興味深い。

現在、垂直紋綜絢の使用は各県で見られ、タイ系民族以外の民族においても使用が見られる。また各地でピエンチャンで作られた垂直紋綜絢を備えた箆が見られることから、サムタイ村と同様、ここ40年程の間にピエンチャンから伝播し定着した可能性があり、各地域の経糸の開口方法やその他の技法に多大な影響を与えていると考えられる。そのため今後の調査では、この垂直紋綜絢の伝播を考慮しながら行う必要があるだろう。

また、ピエンチャンにて垂直紋綜絢に関する調査を行う必要がある。

注

- 1 政治組織のひとつであり、女性による大衆組織：カム・ヴォーラペット『現代ラオスの政治と経済 1975-2006』p.108、109、115 めこん 2010年
- 2 サムタイ村の仏教信仰者には、祖先の霊に話しかけることができる人はいても、会話

をできる人はいないため、儀式を行う際には精霊信仰者であるタイデン族の呪術師に依頼している。

- 3 2004年 - 2012年 ラオス滞在中に仏教信仰者による精霊信仰を各地で確認することができた。
- 4 結婚や出産、旅立ちといった人生の節目などにその人の幸福や健康を祈って手首に糸を巻く儀式。
- 5 2006年・2008年 フアバン県内の各郡にて行った聞き取りによる。
- 6 おんぶ布や掛け布団、間仕切り布、頭に巻く布などの模様。
- 7 近隣の少数民族との物々交換や少量の販売は行われていた。
- 8 サムタイ村から6 km離れたタイデン族の村の女性の呪術師（自称約80歳）に儀式で使う布の模様について聞き取りを行ったところ、以前は呪術師しか身につけることができなかった崇高な意味を持つ模様が、今では大量に織られ、一般人や外国人が手にするようになったということであった。
- 9 ラオスの人口の約6割を占めるタイ系民族の民族衣装である筒状のスカートのことであり、現在では民族に関わらず、公務員や学生の制服、正装、または普段着として広く着用されている。
- 10 シンの裾に付ける飾り布。
- 11 ティンシンはシンの一部であるため、シンという表現に含めた。
- 12 都心部で長く生活したことのある若い女性の一部では、正装として以外はほとんど着用しない人もいた。
- 13 年代によって多少の違いはあるが、嫁入り道具には、白綿布、シン、嫁ぎ先の祖先の霊のための枕、間仕切り布、蚊帳、座布団、枕、掛布団、敷布団、シーツ、杼、椅子、籠、他に農具や調理具がある（箆は嫁入り道具には含まれない）。これらの内で布製のもののほとんどが白綿布を用いて作られるが、現在では市場で購入することが多い。しかし、シン、祖先の霊のための枕、間仕切り布は、現在でも花嫁（又はその家族や親戚）によって織られている。そのシンや布の出来によって花嫁の持つ織技術のレベルをはかられ、嫁の良し悪しを判断される。また、花嫁が嫁ぎ先に持っていくシンは、信頼や尊敬の意味を持って花婿側の家族や親戚の女性達に贈られ、その贈られた女性達も花嫁にシンを贈る。姑からはシンに加えて白綿布が贈られる。
- 14 筆者が滞在期間中にバンサワン村にて、サムタイ村出身でバンサワン村に移り住んだ

女性（ラオプット族）の葬儀が行われた。葬儀の中で白綿布は、死者の体を巻く布、親族の女性が身に着ける布、寺や死者への供養物を包む布など様々なところで使用され、また棺桶の上には死者の親戚が持ち寄った白綿布が置かれるなど、重要な役割を果たしていた。

- 15 以前は頻繁に織られていたが、現在では日用品を市場で購入することが増えたため、2・3年に一度織る程度となっている。
- 16 絹糸と綿糸を混合して織られている場合はそれぞれ0.5として算出した。絹糸・綿糸には、市場で購入された化繊糸の場合もあったが、織手の証言通り扱った。
- 17 ラオスの古都であり、観光地。1995年より世界遺産に登録されている。
- 18 綿糸やナイロン糸で作った垂直紋綜紵は、村で作られた箆と共に使用されていた。
- 19 織手に対し、親戚・親類がビエンチャンにいるかという質問に、織手44名中35名（約80%）がいると答えている。
- 20 村人が村とビエンチャンを移動する際にはお互いに荷物を運びあうという暗黙のルールがある。私が滞在した短期間においても、5・6組の村人がビエンチャンから村へ戻る際に、糸や箆を含む沢山の荷物を運んでいた。
- 21 ビエンチャン製の箆は箆目が混みすぎしており、白綿布がきれいに織れない。そのため白綿布を織る際に村では通常、箆目の粗い村製の箆で織られる。

表1 サオ市場における布の生産地別取扱量

取扱量	ビエンチャン	サムヌア地方	バクセー地方	サワナケート地方	シェンクワン地方
多い	42	9	0	0	0
少ない	3	28	18	6	9
なし	1	21	40	52	49

（回答には重複あり）

表2 ビエンチャンの織手の出身地方

ビエンチャン	サムヌア地方	その他	様々	知らない
20	17	3	7	15

（回答には重複あり）

様々...出身地は様々でどの地方とは言えない。

表3 サムタイ村の人口統計

民族名	戸数	男性	女性	計
ラオプット族	71	406	204	610
タイデン族	8	51	28	79
タイカオ族	2	11	5	16
計	81	468	237	705

(2011年3月現在)

表4 サムタイ村で生産されている布

名称なし	パービアン	シン	ティンシン	白綿布
61	17	11	1	1

名称なし...用途による固有名称がなく織られている模様やその大きさで呼ばれている布
 パービアン...仏教徒が仏教行事で使用する肩掛け布
 シン...タイ系民族の民族衣装である筒状スカート
 ティンシン...シンの裾に付ける飾り布
 白綿布...白の綿糸で織られた布

表5 生産した布の売り先

村の元締め	他の村の元締め	首都の元締め	首都の親戚	他県他郡の親戚
25	14	13	9	2

(回答には重複あり)

表6 シンと白綿布の生産

	シン	白綿布
織る	40	44
母が織る	2	0
織らない	2	0

表7 緯浮織に使用されている開口具

開口具	垂直紋綜統と紋棒の併用	垂直紋綜統	紋棒	輪状綜統	輪状綜統と紋棒の併用
台数	59	16	5	2	1

表8 元締めに布を売り始めた時期

	72'	73'	74'	75'	76'	77'	78'	79'	80'	81'	82'	83'	84'	85'	86'	87'	88'	89'	90'
元締めの出現以降				4	1		1		1	2	1			1			1		1
織技術習得以降	1				1							1		2	2	1			
婚姻による移動以降																			
記憶なし																			
	91'	92'	93'	94'	95'	96'	97'	98'	99'	00'	01'	02'	03'	04'	05'	06'	07'	08'	計
元締めの出現以降	1	1			1	1				1	1								19
織技術習得以降		2	2	1				1	1		1								16
婚姻による移動以降									1				1					1	3
記憶なし																			6

表9 垂直紋綜統の使用開始時期

	73'	74'	75'	76'	77'	78'	79'	80'	81'	82'	83'	84'	85'	86'	87'	88'
村箒・綿糸	1		1	1	1	1					1					
村箒・ナイロン糸							1									1
ピエンチャン箒・ナイロン糸																
素材不明	1		2			1			4					1		
全く不明																
	89'	90'	91'	92'	93'	94'	95'	96'	97'	98'	99'	00'	01'	02'	03'	計
村箒・綿糸		1					1									8
村箒・ナイロン糸			1					3	1				1		1	9
ピエンチャン箒・ナイロン糸		2		1	1	1	3	1	1	1	2	1			1	15
素材不明		3														12
全く不明																6

(回答は複数)